

2026.6
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま
富 薬

6号

第48巻
No.443



テイカカズラ *Trachelospermum asiaticum* Nakai

(キョウチクトウ科 *Apocynaceae*)

生薬

ラクセキ（絡石）7-8月ころ、果実と茎葉を採取して、刻んでから天日乾燥する。

成分

リグナン配糖体：tracheloside, arctiin, matairesinoside, nortracheloside、フラボン配糖体：apigenin, luteolin等。

効能

解熱、鎮痛、活血薬としてリウマチなどによる関節痛、筋肉の炎症、咽喉腫痛、化膿症などに用いるが、毒性があるため、民間での利用は控える。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



朝鮮半島、本州、四国、九州、沖縄の比較的温暖な場所に分布する常緑のつる性木本です。古くはマサキノカズラと呼ばれ、茎は気根を出し岩や木を這い上り、太いもので径4cmに達します。葉は対生して卵状皮針形で葉質は厚く光沢があり、革質で全縁、茎や葉を切ると白い乳液が出ます。花期は5-6月、枝先や上部の葉腋にまばらな集散花序をつけ、花を咲かせます。花径は2-3cmほどで、花冠の基部は筒状で、先端は5裂して広がり、それぞれわずかにねじれ、全体としてプロペラ状になります。花ははじめ白く、次第に淡黄色になり、ジャスミンに似た芳香があります。果実は長さ約20cmの細長い袋果で、2個が対になってぶら下がり、熟すると縦に裂開して銀白色の冠毛がある種子を出し、風に乗って遠くへ運ばれ繁殖します。常緑で育てやすいため庭や垣根に植えられることも多く、葉に斑が入るハツユキカズラや葉が赤みがかっているゴシキカズラなど観葉植物として栽培されています。

テイカカズラは国内に自生することから古い時代から記録が残っています。『出雲風土記』(733)の「意宇郡、粟島」に「真前等の葛あり」と「マサキドモノカズラ」の名で記録されています。『古事記』(712)の「天の岩屋」には「天宇受売は、天香具山の日陰蔓(ヒカゲノカズラ *Lycopodium clavatum*)を襷にかけ、真拆葛を髪に纏い、天香具山の笹(*Sasa*)の葉を束ねて手に持ち、天の岩屋戸の前で桶を伏せてこれを踏み鳴らし、神がかりして、胸乳をかき出だし、裳の紙を陰部まで押し下げた」と「マサキノカズラ」の名がでてきます。『万葉集』(7C-8C)には「岩綱のまた変若ちかへり あをによし 奈良の都を またも見むかも」の「岩綱」を詠んだ歌や「這ふ鳥」、「延ふ鳥」を詠んだ5長歌があります。『古今和歌集』(915)にも「み山には あられ降るらし と山なる まさきのかづら 色づきにけり」と詠まれ、「まさきのかづら」の葉が一部紅葉することを著しています。

『本草和名』(918)には「絡石 和名都多」、『倭名類聚抄』(931-937)に「落石 和名都太」と漢名「絡石」、「落石」に対し「ツタ」の名を与えています。この「ツタ」が「テイカカズラ」であるかは判然としませんが『万葉集』で「つな」、「つた」と詠んでいるものが「テイカカズラ」を指すものであるならば平安時代から絡石=テイカカズラとされていたこととなります。

和名「テイカカズラ」が使われたのは室町時代(1336-1573)で、金春禪竹(1405-1470)作とされる謡曲『定家』が基になっています。そのあらすじは「冬のはじめ、北国出身の旅の僧が京都・千本を訪れ、近くの建物で雨宿りをしていると、そこに一人の里女が現れ、式子内親王(1149-1201後白河法皇の第三皇女)の墓に連れていき、深い契りを結んだ藤原定家(1162-1241平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての歌人)が、二人の死後も執心から「定家葛」となって墓に絡みついていることを語ります。旅僧が内親王の成仏を願って墓の前で法華経を読誦していると、式子内親王の亡霊が墓から現れます。定家葛が解けて自由の身になったことを喜び、墓へと戻っていくのでした」と語られ、からみついた「葛」に後年、「定家葛」の名前がつけられました。

以後の古文書『文明(1469-1487)本節用集』にその名が初出し、江戸初期の『多識編』(1612)には「絡石 豆多。今案ずるに天伊可賀豆」と、『大和本草』(1709)には「絡石」、『和漢三才』(1713)には「絡石 俗に云う定家葛」、『用葉須知』(1726)は「絡石 和名定家カツラ」、『本草綱目啓蒙』(1803)「絡石 ていか、づら」と全て絡石=テイカカズラになっています。(村上守一 記)